《マジカル・イスラーム》と
現代インドネシアのムスリム社会
フェビー・インディラニが描く危機感と希望

野中　葉

イスラーム寄宿学校内モスクにて、女子生徒たちの集団
礼拝の様子（インドネシア・ジャカルタ）　撮影：野中葉

1．はじめに

2017 年にインドネシアで出版された短編集フェビー・インディラニ著『処女でないマリア』を事例に、インドネシアで今起こっている社会の変化と、それを映し出す小説の内容についてお話ししたいと思います。

『処女でないマリア』には 19 の作品が収録されています。『中東現代文学選 2021』には、この 19 作品の中から「イスラーム教徒になりたいベイビ」と「処女でないマリア」という 2 つの短編小説を訳したのですが、今日の発表では、この 2 作品に加え、「天使の質問」も合わせ、3 つの作品をご紹介します。

タイトルにある「マジカル・イスラーム」とは、本作品の著者フェビーが自分の作品のジャンルとして自ら名付けている用語です。近年インドネシアでは、穏健で寛容とされてきたイスラームの保守化が進んでおり、他の宗教や「正統でない」イスラームを排除するような動きが顕在化しています。今日ご紹介するフェビー・インディラニは自身の作品を「マジカル・イスラーム」と呼び、ファンタジーとユーモアを交えながら、こうした社会変化を痛切に批判しています。本報告では現代インドネシア社会の現状を踏まえつつ、フェビーの短編小説の世界観と意義を考察します。

作品の内容に入る前に、作品誕生の背景を理解していただくため、インドネシアのイスラームの概要と近年起こっていることをお話しし、さらに、フェビーの作品につながるインドネシアの文学の潮流を概観します。と言っても、私は文学の専門ではないので、ここ 30 年から 40 年ほどの小説の潮流をごく大雑把にお話しすることしかできませんが、その後で作品の話に移ろうと思います。

2．インドネシアのイスラームの変容

インドネシアは、人口の 9 割弱がイスラーム教徒という、ムスリムがマジョリティの国です。世界 4 位、約 2 億 7000 万人の人口ですが、そのうちの 9 割、つまり約 2 億 3000 万人がイスラーム教徒です。これは一国と

しては世界最大のイスラーム教徒の数であり、インドネシアは世界最大のムスリム人口を誇る国なのです。

インドネシアは東南アジアの大国だと言われることもあります。島国であり、東西は大変長くて、アメリカ合衆国と同じぐらいの幅があります。マレーシアやシンガポールとは大変近い存在で、これら一帯をマレー世界と呼ぶ言い方もあります。

歴史的にいえば、インドネシアという国自体は1945年に独立を宣言した若い国ですが、この地には13世紀から17世紀ごろにかけてイスラームが少しずつ浸透していきました。最初はインド洋を経由して、2004年に大地震の発生したインドネシア最西端のアチェの辺りから徐々に広がっていったのです。武力で一気に改宗を迫られたのではなく、商業的な利害関係から各地の王国が自発的に漸次イスラーム化していったことが、13世紀から17世紀という長いスパンをかけてイスラームが広まった原因だと考えられています。こうして広がったイスラームは、この地では、「外来の」「後発の」宗教として考えられてきました。インドネシアの地にイスラームが到来する以前に、既にインドや中国の文明の影響を受けたヒンドゥー、仏教、または土着のアニミズム的な信仰などが根付いており、それと混交する形でイスラームが根付いていきました。ですので、イスラームと呼ばれているものの中にも、土着の文化や土着の信仰などがかなり含まれているのです。そういう影響もあってインドネシアのイスラームは本場の中東に比べて穏健、寛容で、ある意味緩やかだというふうに長い間評価されてきましたし、インドネシアの人々もそのように自認してきました。

これに大きな変化が訪れるのが、1980年代以降のことです。この時代は権威主義体制下であり、東南アジアの文脈でいえば開発独裁時代のまっただ中です。経済は大きく成長した一方、反対勢力や、反対勢力になる可能性があると見做された者や勢力は、厳しい監視や弾圧の対象になりました。最初に徹底的に弾圧されたのは共産主義と目される人たちで、ご存じの方もいるかもしれませんが、『アクト・オブ・キリング[※1]』という映画で描かれた時代を経て、権威主義体制、開発独裁の体制が1960年代後半に始まりました。

人口の多数派を占めるイスラームについては、モスクが各地に建てられたり、イスラーム教育が学校制度の中に定着するなど、個人レベルの信仰実践は許容され、むしろ推奨されましたが、一方で政治的に伸長する集団としてのイスラームや、学生運動は徹底的に弾圧されました。こうした体制下で都市部の大学生や、台頭してくる中間層を中心にイスラームの教えに自覚的な人々が出現したのです。

中東研究者や、他の地域を研究されている皆さんには、こんなに最近のことなのかと思われるかもしれませんが、クルアーンの翻訳本、つまりインドネシア語版クルアーンが流通し、販売されるようになり、一般の人たちが自分でクルアーンに書かれた内容を読み、理解するようになったのもこの開発独裁体制下の 1970 年代から 1980 年代にかけてのことです。クルアーン翻訳本も含め、こうした書籍を受容したのが、急激に増加してきた大学生、および大学生から社会人になった中間層の人たちでした。その後、インドネシアは 1998 年に民主化しますが、2000 年代にはこれがさらに大きく変化し、社会がイスラーム化していると言われるようになりました。個人の信仰自体がどうかというのはまた別問題としても、社会のあらゆる側面でイスラーム的なものが目立つ現象は、この 20 年ぐらいでとても増えました。

私が最初にインドネシアに行ったのは 1990 年初頭ですが、当時はヴェールを身に着けている人は大変少数でした。イスラーム教徒の女性と言えど、半袖に膝丈のスカートが主流のファッションだったのが、この 30 年の間にヴェールを着けている人が圧倒的に多くなりました。中にはニカーブ[※2]と呼ばれる顔まで隠すヴェールを着用する人たちも現れるなど、女性の服装一つとってもこの 30 年ほどで状況は 180 度変化したと言えます。真面目に宗教実践をする人たちも確実に増加しているように見えますし、イスラーム的であることが良いとされるようになりました。逆に、イスラーム的ではないことは忌避される傾向が強まっています。例えばラマダーン月に断食していない人もいるのですが、していないと口に出して言うこと自体で後ろ指をさされたり、ヴェールを着けていないムスリマもいますが、その人たちも、やや後ろめたい気持ちを持っていたり。イスラーム的でな

いことよりもイスラーム的であることの方が良いという価値観が急激に広がっていると感じます。

こうしたインドネシア社会の変化を内外の研究者が研究していますが、例えばライフスタイル自体がイスラーム化しているとか、あるいは、経済の結びつきとの側面からイスラームが商品化しているという言い方もされるようになりました。さらに、イスラームのポップカルチャー化という議論もあります。これからお話するフェビーの作品も、イスラームの要素を多分に含んだ大衆小説の一つという位置付けもできます。この観点で言えば、今日の報告はイスラームのポップカルチャー化の事例とも言えるのかもしれません。

また、大変興味深いことに、インドネシア社会では、圧倒的にイスラーム教徒が多いにもかかわらず、そして、開発独裁の時代以前から国産の映画が多く作られてきたにもかかわらず、2000年代半ば頃になるまで映画の中でヴェールを着けている女性が描かれることはほとんどありませんでした。それが2000年代半ば以降この15年ほどの間で、ヴェールを着用した敬虔なムスリマが主役やヒロインになる映画が多く制作され、人々に受容されるようになっています。

さらに2010年代頃には、オランダの著名なインドネシア研究者Bruinessenが、イスラームの「保守転回（conservative turn）」と呼ぶ状況が出現しました。[※3] どういうことかというと、「正統でない」イスラームや非イスラーム的なものを排除する傾向が社会の中で目立つようになったということです。人々が、これまで以上にイスラーム的なものを求め、実践する傾向が強まっているといえます。

いくつか例を挙げると、例えば、アフマディーヤやシーア派に対する攻撃があります。アフマディーヤはイスラームの異端とされるグループの一つであり、シーア派は多数派のスンナ派と並ぶイスラームの二大潮流の一つです。アフマディーヤもシーア派も、インドネシアには長く存在し、近年でもアフマディーヤには何十万人もの人が、シーア派には少なく見積もっても百万人程度の人が属していると言われています。これまでは、それぞれ普通に生活してきたわけですが、この20年ぐらいの間に、アフマ

ディーヤやシーア派の人たちに対する排除や物理的な攻撃が頻繁に報じられるようになりました。アフマディーヤに対する攻撃が目立ったのは、10年以上前で、当時は、アフマディーヤの人たちが住む集落が暴力的に壊されたり、“BUBARKAN AHMADIYAH(アフマディーヤを解散させろ)”という抗議デモが全国的に起こったりしました。結局、彼らの存続は認めるけれども、表立った宣教は禁止するとする政府の見解が示されたことで、一応の終結を見ました。最近の人々の攻撃の矛先はシーア派に向いていると言えるかもしれません。

もっと最近で言えば性的マイノリティの人たちに対する嫌悪、排除があります。元々、同性愛者や女装した男性はインドネシア各地にいて、アニミズム的な文化や信仰が根付く社会の中で、特にトランスジェンダーの人々はスーパーパワーを持っているとして、むしろ特別扱いされる地域もありました。しかし今では、LGBTQという呼称がインドネシアでも一般的になり、グローバルな流れの中で自らの権利を主張する人々も現れるようになりました。その一方で、イスラーム的なものが良いとされる価値観は急速に広まっており、そうした中で、LGBTQという呼称で括られた人たちに対する嫌悪や排除も大変強くなっています。

2016年には、現職のジャカルタ州知事に対する排斥運動が急激に盛り上がりました。この州知事は華人系のクリスチャンだったのです。大変やり手の知事で、それまでのインドネシア的な「なあなあ」の行政を徹底的かつ急速に改革したので、とても評価された反面、多くの敵も作りました。彼がクルアーンの章句を引用して演説したところ、これはクルアーンやイスラームに対する冒涜だとしてネットで叩かれ、それが全国に拡大しました。そもそもは、ジャカルタ州知事の失態ですので、別の地域の人たちにはあまり関係がないのですが、「クルアーンとイスラームに対する冒涜だ」という話に膨らんだことにより、全国規模の行動に発展しました。特にジャカルタでは、金曜の集団礼拝をすることで抗議を示そうという呼びかけで、大広場や目抜き通りを大勢の人が埋め尽くし、その様子は日本でも報道されました。最終的にこのジャカルタ州知事は逮捕されてしまいました。

またこの頃には、人々の間でとてもおかしな現象が見られるようになり

ました。インドネシア語で “Lafaz” と言いますが、雲や木の枝の形などにアッラーの徴が見えると言われるようになったのです。例えば、先のジャカルタ州知事への抗議デモの際にも、空に浮かぶ雲の形がアラビア語の「アッラー」という文字に見えると話題になり、SNS でこの雲の形が拡散し、デモ行動自体、神に守られ、祝福されているのだと、皆が信じるようになっていきました。州知事に対する最初の大きな抗議デモは、2016 年 11 月 4 日に実施されました。インドネシアで一般的な日・月の順で表記すると、この日は「411」。これがまたアラビア文字のアッラーに見える、Lafaz だと話題になり、たまたまその日に実施されたことも神のご意思だったのだ、というような言説が作られ、広まっていきました。今日お話しするフェビーの短編集『処女でないマリア』の中には、この Lafaz 現象を風刺し、子どもの排泄物に Lafaz が見えるという話が含まれています（「アッラーの徴が…」資料 2 No.19 参照）。

西ジャワトリビューンの 2016 年 11 月 4 日のネット記事「11 月 4 日デモの金曜礼拝の前に空に現れたアッラーの徴」

さらに、今回お話する作家フェビーが作品の中で取り上げてきた題材に近づけて言うと、例えば今までインドネシア語やマレー語の用語で言われていたものの中に外来語としてのアラビア語がたくさん入ってきたり、先ほど言ったようにニカーブを着用する人が増えたり、金曜礼拝時に周辺の道路を封鎖してモスクに来る人たちのための駐車スペースを作ったり、金曜礼拝に行く人専用の道にしたり、早朝のモスクからのアザーン[※4]の音が年々大きくなっているなど、様々な事象が見られるようになりました。大変ミクロなレベルの変化ではありますが、こうした話は各地で指摘されるようになり、また社会問題化しています。

こうしたイスラーム化、イスラームの「保守化」の流れの中で、攻撃・排除の対象とされるのは、イスラームを真面目に実践しない者、それからイスラームの中で異端とされる者、土着文化などです。今までイスラームの中に含まれていると思われていたような土着文化も、本来はイスラーム

ではなかったということで排除の対象になったり、同性愛者や他の宗教、また、不浄なものとされる犬や豚なども含まれたりします。さらにハラームとされるもの（イスラーム法で禁じられたもの）、禁忌とされる事柄などが攻撃の対象になっています。先に紹介したBruinessenは、2013年の著作の中でこうした状況を次のように論じています。

> 1980年代から90年代にかけ、スハルト体制に好まれ、多くのメディアで好意的に取り上げられたリベラルなイスラーム（liberal Islam）や進歩的イスラーム（progressive Islam）は周縁化され、スハルト体制下では抑圧されてきたイスラーム主義が台頭した。（中略）
>
> 彼ら（リベラル・イスラームや進歩的なイスラーム）は、主流派団体の中で残存しているが、現状、大勢（established authority）に対しておおっぴらに声を上げることはない。[※5]

3．インドネシアの文学の潮流

「インドネシアの文学の潮流」と、とても大きなテーマを掲げましたが、ここでは、作家フェビー・インディラニの誕生につながる話を中心に、ごく簡単に概略だけお話しします。

1970年代以降、インドネシアでは、先ほどお話ししたようにポップカルチャーが隆盛するわけですが、それ以前の文学は世代ごとに論じられる傾向にあります。一つは「45年世代」。1945年はインドネシア独立の年です。それともう一つは「66年世代」。これは初代大統領スカルノから、その後、開発独裁の道を突き進むことになるスハルト大統領に、実質的に権力が移譲された年です。この二つの年代で文学の潮流が大きく変わり、また、その時代に特徴的な文学があったと言われることが多いです。

「45年世代」は、植民地支配からの独立期であり、文学もまた、ナショナリズム運動やヒューマニズムとの結び付きが強いです。ご存じの方もいるかもしれませんが、例えばプラムディヤ・アナンタ・トゥール[※6]という大変著名なインドネシアの作家がいます。彼はノーベル賞をとるかもしれな

いとインドネシアではずっと言われてきましたが、2000年代初頭に亡くなりました。プラムディヤなどはこの世代に含まれます。一方、「66年世代」はスカルノ大統領からスハルト大統領への権力移行期であり、社会的・政治的抗議の表明が文学にも表れた時代と評価されています。

その後、1970年代以降になると、開発独裁の中で経済的に成長し、抑圧的ながらも社会が安定したことを背景に、ポップカルチャーが出現しました。大衆小説やポップノベル、それから新聞・雑誌もこの時期に数多く出版されるようになり、新聞に小説が掲載されるようにもなりました。文学で政治的な批判をすることももちろん弾圧の対象になりますので、文学それ自体も脱政治化していき、イデオロギーや抵抗の精神が欠如した、単なる娯楽としての小説が書かれていく、そういう時代だったと言えます。

よく売れた作品としては『カルミラ』[※7]という小説があります。これは後にテレビドラマや映画にもなりました。主人公は女医。社会的に成功し、活躍する女性ですが、あるときレイプされて子どもを身ごもり、その子どもを出産します。その後、彼女は子どもを親に預けて社会的に成功していきます。一方、レイプした側の男性は、そもそもレイプを行ったという時点でとんでもない奴なのですが、その後、改心して子どもをかわいがるようになり、むしろカルミラの方が、子育てを放棄して自らのキャリアに固執する女性というふうに描かれていきます。結局最後はカルミラも心を入れ替えてレイプした男性と結婚するというストーリーです。恋愛小説ではありますが、当時の家族観、男女の性別役割に対する見解が表れている作品だと言っていいと思います。

同時期に一種の社会現象を巻き起こした作品として知られているのが『ルプス』[※8]です。ティーンエイジャー世代の都市の若者たちを描いた作品で、ルプスという名の男の子とその仲間たちのハイスクール・ストーリーです。この作品には、イデオロギーや抵抗の要素は完全に欠落しており、しかも登場人物たちがどの宗教を信じている人たちなのかすら、全く分かりません。経済発展する都市の生活を楽しむ若者たちを描いた娯楽小説です。

1998年の民主化直後に書かれた小説の一潮流を指して、「芳しき文学(sastra wangi)」という用語が使われるようになりました。この時期には、

複数の若い女性作家が、これまでタブーとされてきたセックスやドラッグ、同性愛、政治などを論じる小説を次々と発表しました。こうした作品を呼ぶ「芳しき文学」という用語は今でも使われています。ここでも宗教性は全く排除されていて、むしろ都会的でコスモポリタンな設定の中で、婚姻関係を伴わないセックスや同性愛が自由に描かれていきます。社会的に活躍している女性が主人公または主要な登場人物で、ニューヨークやロンドンも舞台になっています。「芳しき文学」の代表作、『サマン』[※9]と『スーパーノヴァ』[※10]は日本語訳が既に出版されています。

同時期には、「イスラーム的小説」も流行しました。「イスラーム的小説」の出現自体は、「芳しき文学」より少し前の時代で、1990年代初頭から既に書かれています。今回の『中東現代文学選2021』に、私は、フェビーの作品の他、もう一つ寄稿したのですが、それがこの「イスラーム的小説」の代表格とされる作家ヘルフィ・ティアナ・ロサ[※11]の作品です。ヘルフィ・ティアナ・ロサは、女性作家を中心とする1990年代の短編小説ブームの中心人物です。

1990年代から2000年代初頭にかけては、まだヴェールを着けている人が大変少なかったものの、大学や地域のモスクを拠点にイスラーム運動やイスラームを学ぶグループが立ち上げられ、イスラーム的に社会を変えていけるかもしれないという希望を持ち、一部の大学生たちがイスラームを学んだ時代でした。学生ダアワ[※12]運動とか、キャンパス・ダアワ運動と呼ばれる運動です。こうした運動に参加した女性たちが、運動に参加する中でイスラームを学び、そこで初めてヴェールを着けることに自覚的になったのです。この女性たちの中に、自分たちのことを書く人たちが現れ、ヴェールを着けることやイスラーム的に生きることなどを一人称で書いていくというブームが起こりました。彼女たちは雑誌も刊行し、自らの短編小説を掲載し、それが多くの女子大生、女子高生たちに読まれ、こうした作品がヴェールを着けることを後押ししていくような事態が生じたのです。この時期の代表的作家ヘルフィ・ティアナ・ロサは、自分にとってのダアワは書くことであると言って、若い女性たちをターゲットに、彼女たちが感情移入しながら、イスラームを学ぶことができる作品を次々と発表しました。

これらの作品の多くは、イスラームに目覚めた若い女性が主人公で、若者言葉で書かれ、作者も読者も主人公と同じ年齢層、階層に属する人たちです。作品を通じて、現代社会を生きるムスリマの葛藤、周囲との軋轢、思考の変化、理想像を提示し、大学生や高校生の特に女性の間でのイスラームへの覚醒とヴェールの着用を促進しました。この時期の短編小説が女性たちのイスラーム覚醒に寄与したことに関しては、2014 年に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のジャーナルに論文を発表しましたので[※13]、もし関心があればどうぞご覧ください。

それから、ヘルフィ・ティアナ・ロサが書いたもの中に、『ガガ兄さんが旅立つ時[※14]』という作品があります。アジア・アフリカ言語文化研究所のジャーナルに掲載された論文の中でも分析していますが、この短編小説の全訳は 2015 年に出版された拙著『インドネシアのムスリムファッション[※15]』の付録に載せていますので、もし関心があったら見ていただければと思います。

4．作家　フェビー・インディラニ

『処女でないマリア』

前置きが長くなりましたが、ここからは、フェビー・インディラニの短編集『処女でないマリア』をご紹介します。フェビー自身は、自分の作品の中にイスラームを描いていると言います。その観点で言えば、彼女の作品も、ヘルフィ・ティアナ・ロサ以降の「イスラーム的小説」の潮流の中に位置づけることができます。ただしフェビーが書いている内容は、先ほど私がお話しした「イスラーム的小説」の作品群から抜け出て、新しいジャンルを作りだしているのではないか、という視点で今日はお話ししたいと思います。

1990 年代以降、ヘルフィ・ティアナ・ロサたちが、彼女たちの言葉を借りれば、作品を通じてダアワを行った結果、それが実を結び、さらにはそれが高じ

て、社会の中でイスラーム的なものがものすごく強くなりすぎたのが今の時代だと言うことができそうです。振り子が大きく振れて、度を越してしまっているのではないか、そのことに気づくべきではないか、と考えている人たちの一人がフェビーだというふうに理解していただければいいかもしれません。

フェビー・インディラニは1979年生まれで、ジャカルタ出身。西ジャワのバンドゥンにあるパジャジャラン大学でジャーナリズムを学び、卒業後はフリーランスのジャーナリストをしながら小説を書くようになりました。その後、修士号をロンドン大学で取得しています。

作品の多くは女性やマイノリティの問題に焦点を当てており、自らの作品を「マジカル・イスラーム」と称しています。今日ご紹介する短編小説集『処女でないマリア』を2017年に出版し、2021年に再版しています。2020年には『ムハンマドを追いかけて』[※16]という別の短編集を出版しています。これは、『処女でないマリア』の続編だということです。フェビーによれば、『処女でないマリア』と『ムハンマドを追いかけて』はトリロジーで、「3作目を今書いているところだ」と言っています。『処女でないマリア』は2019年にイタリア語版が出版されました。

5．短編小説集『処女でないマリア』

『処女でないマリア』には、19の短編小説が収録されています。19作品それぞれのタイトル、簡単な要約、主人公、風刺・批判の対象をまとめて表にしました（資料2参照）。

どの作品もユーモアあふれるフィクションですが、扱っているテーマは現状の主流派イスラームに対する批判が込められていると私は読んでいますし、フェビーも自分でそう言っています。ファンタジーではあるけれど、内容はかなり過激ですし、ファンタジー仕立てにしなければ書けなかったのかもしれません。こんなことまで書いて大丈夫なのかと、作品を読んで何度も思いました。そもそも出版を予定していた出版社が、出来上がった作品を読んで、「これはあまりにイスラームを冒涜している。出版できま

せん」と言って出版を拒否するなど、実際出版されるまでには紆余曲折があったようです。結局、初版は、Publikultur という独立系出版社から出版し、大手書店を通さずに、慎重に流通・販売したと聞いています。ただ、2021 年に再版したのは割と大きな出版社だったので、その後かなり読まれて支持を得たと私は理解しています。

2018 年に私が実施したインタビューでフェビーは次のように話してくれました。「内容は、日々の生活の中で疑問に感じたこと、不満に思ったこと。生まれた時からイスラーム教徒だけれど、ムスリムだけがこんなに大きな顔をしていいのか、という気持ち」「対立なしに、センシティブな内容を伝えたい。だからファンタジー小説という手法で。目指すのは、宗教を解きほぐすこと（Relaksasi Agama）[※17]」。

設定はファンタジーであり、現実にはほとんど起こらない内容ばかりです。死後の世界を描いた作品も目立ちます。死者が主人公で、死後の世界を見ていくようなテーマや、天国の乙女に関する話もあります。天国には乙女たちがいるというクルアーンの記述を取り上げて、だから天国に行きたいと考える男性たち、乙女に会えることを天国に行くことのモチベーションにしようとする主に男性向けの言説に対して、フェビーはとても引っ掛かっているようで、このこともテーマになっています。天使が出てきたり、悪魔が出てきたり、妖精や、女性の悪魔が登場したり、現実にはあり得ない奇跡も描かれています。自分の子どもの排泄物の形がアッラーという文字に見えるとか、男性との交わりなしに妊娠したという女性が主人公の話なども含まれています。

現実にはない不思議な現状・設定として、後ほど簡単にご紹介する「イスラーム教徒になりたいベイビ」という作品では、豚がイスラーム教徒になりたがっているという話が出てきます。豚がイスラームに入信したいと言っているが、それを許すかどうかというウラマーたちの議論がテーマです（資料 2, 作品 1）。

それから、イスラーム教徒は礼拝するときに床にひれ伏して、額を床に付けます。今のインドネシアでは、額に礼拝の痕が付いていることが、敬虔な信者の証だと考える人たちが一定数いるのですが、それを風刺する作

品もあります。この額の痕が黒いほくろとして残り、ほくろがどんどん増えていき、顔全体がほくろだらけになっていくという話です。この主人公の男性はイスラーム急進派の一人で、ラマダーン月の昼間に店を開けている食堂などを取り締まっています。周りからも「あいつは厳格で敬虔だ」と評価され、「礼拝痕が額に付いている」と指摘されて最初はとても鼻高々なのですが、自分の顔にどんどんほくろが増えていくことに困惑するという話です（作品 5）。

また、妻が夫に妖精との結婚を懇願したり（作品 7）、幼児の排泄物に Lafaz（アッラー）が出てきたり（作品 19）、天使が「こんなに憎しみ合っている人間たちを救うことができないから休暇を取らせてください」と上司の天使に頼むという話があったりします（作品 15）。逆に「悪魔の早期退職」という作品では、悪魔の王であるイブリースの一人が「僕の仕事はもうなくなった。こんなに悪い世界なら悪魔の仕事はもうない。早期退職させてくれ」と言って認められ、その代わりに人間になることを命じられて、最終的に偉いウラマーになって人々にちやほやされるという話もあります（作品 10）。

現実にはない設定ですが、フェビーが問題としているのは日常に転がっている社会問題であり、多くのインドネシア人たちが「行き過ぎなのではないか」と思えるような事柄です。例えば、アザーンの音量の話もあります。夜中までナイトクラブの警備員をやっている男性が 1 時すぎに家に帰って寝ようとするのに、明け方 3 時には、礼拝の刻を告げ知らせるアザーンが聞こえてくるので、「もうやめてくれ」とモスクの管理人に言いに行く。しかし管理人には、「いやいや、イスラームでは大切なものですから」と言われて、全く取り合ってもらえない。結局ムアッジン（アザーンを朗誦する役の人）を殺す計画を立てるという話です。計画を立てている途中で、結局ムアッジンが急に亡くなったということを知り、「僕が殺害計画を立てていたからだろうか」と警備員は後悔するという結末です（作品 3）。

それから、金曜礼拝時に道路を封鎖された主人公が、大切な仕事に遅れてしまうので「何とかここを通してくれ」と言って回り回り回ってもまだ通してくれなくて、「ジャカルタはどうなってしまったんだ」と嘆く話も

あります（作品 2）。

また、とても残念ですが、インドネシアでは今でも自爆テロが散発的に起こっています。自爆テロの実行犯は天国で乙女と結婚できるという言説がどこかで広まっているようで、これに対してフェビーは小説の中で反論しています（作品 9）。

他にも、例えば「2 人の友人の会話」などはとても面白いです。ヤシルとヤミンという親友同士の会話で物語が進んでいきます。二人は、ヤミンが読んでいるイスラームの本について話しています。天国の乙女が古きよき女性のようにおしとやかに描かれていることに対し、ヤシルは「現在はもっと大胆で一緒に議論できるような女性の方がいいな」と言ってみたり、乙女の肌が白いという描写に対して、「白人至上主義だね。茶色や黄色や黒人の天女はいないのかな」と言ってみたり、インドネシアでは「肉付きのいい胸元」という描写がされたりもしますが、それに対しても「シリコンを入れてるのか」と言ったりするのです。また天国では、男性はみんな 30 歳で、年を取らないという描写に対して、「僕らはまだ 20 歳なんだけどな。今のまま若い方がいいな」と言ってみたり、そういうくだりが続いていく物語です（作品 11）。

繰り返しになりますが、風刺・批判の対象は、イスラームの優位性を主張し、他の宗教や弱者、マイノリティを配慮しないムスリム社会です。また、フェミニストとしてのフェビーの視点も見え隠れしています。一夫多妻制や天国の乙女についての指摘はその例と言えます。家父長制や、宗教リーダーが男性ばかりだということに対しても疑問が投げ掛けられています。その他、弱者への無関心、マイノリティの排除といったこともテーマになっています。

6．作品紹介

ここからは、三つの作品を取り上げて、少し詳しく分析しようと思います。取り上げるのは、「イスラーム教徒になりたいベイビ」、「天使の質問」、「処女でないマリア」の 3 作品です。「イスラーム教徒になりたいベイビ」

と「処女でないマリア」は、『中東現代文学選 2021』に掲載された作品です。「天使の質問」は、資料 1 として全訳を載せています。

6-1. 設定（ファンタジー）

設定は、3 作品とも、完全にファンタジーです。
「イスラーム教徒になりたいベイビ」は、キヤイ・フィクリという名のウラマーが主人公です。

> キヤイ・フィクリが提起した議題によって、ウラマーたちの評議会は一瞬で騒がしくなった。なんと、ベイビという一匹の豚が、イスラームに入信したいというのだ。議場のあちこちから「アスタグフィルッラー」という声が聞こえ、意見を述べたい者たちの手が一斉に上がり、また手を挙げて許可を取る必要もないと考える何人かの参加者は、そのまま声を上げ始めた。[※18]

というくだりで物語が始まります。
「処女ではないマリア」もスタートのところで大体雰囲気がつかめる作品です。

> マリアは妊娠した。男性と交わりを持つことなく。誰とも結婚していないのに。妊娠を知った時、彼女はとても怖くなった。今は2016年。聖母マリアの身に起こったような奇跡を誰が信じてくれるだろう。大昔、預言者イーサが誕生した時に全ては終わったのだ。今、マリアが誰とも関係を持たずに妊娠したと、誰が信じるだろう。ましてやマリアは処女ではないのだ。[※19]

主人公マリアは、聖母マリアと同じ名前であるものの、彼女が男性との交わりなく妊娠したということは、当然誰にも信じてもらえないわけです。挙句の果てに親友からは、「あなたは処女じゃないでしょう」と冷た

く言われたりもします。

それから「天使の質問」。これは若くして亡くなるサスミタという女性の話です。彼女がなぜ亡くなったかについての記述はないので分からないのですが、彼女は33歳で死を迎えます。でも、彼女は生前、来世で天国に行くことを目標に、死に備えてアラビア語を勉強し、一生懸命イスラームを学んできました。死んだ時に何が起こるかについても勉強しました。天使が2人やって来て、生前に何を行ったかを尋ねるということも分かっています。物語は彼女が死んだ直後の設定なのですが、以下は、天使に対面し、聞かれることを準備している時の描写です。

> サスミタは、この二つのものの姿をドキドキしながら、でも注意深くチェックした。クルアーン朗誦の先生は、不信心者のもとに赴く時、天使ムンカルとナキールはとても恐ろしい姿をしていると言っていた。二人の歯は牙のようで大地を鋤き、彼らの髪の毛は大地を掃くのだと先生は言っていた。でも、サスミタの前にいるものは、普通のように見えた。少なくとも、彼らの口から牙のような歯は飛び出ていなかったので、それは良い徴だった。[※20]

6-2. 風刺・批判

「イスラーム教徒になりたいベイビ」、この物語は、ある人物、あるいはある物がイスラーム的かそうでないかを、他の誰かがジャッジすることに対する異議申し立てだと私は読んでいます。ものすごく大きな権威を持つようになったウラマー集団が、イスラーム教徒になりたいという弱い者(物語では「豚」)を、入信していいか拒否するかジャッジするということに対してフェビーは風刺していると読むことができます。こういうくだりがあります。

> 「高貴なキヤイがベイビと仲良くできるって、どうなってるんだよ」
> 「絶対許せないだろ！　豚にまつわるあらゆることがハラームなん

だ。すべての要素がね。議論の余地なし！」

「イスラームに入信したいという者を禁じる権利が我々にあるのだろうか。だってイスラームは、万有への恵みじゃないか。[※21]」

集まっているウラマーたちの中にも、いろいろな意見があるわけですが、結局その評議会ではベイビ（豚）はイスラーム教徒になることを許されません。ウラマー集団がこうして権威化していくことを、フェビーは批判しているのです。

「処女でないマリア」では、主人公マリアは、親友に全く信じてもらえません。

「で、父親は誰なの？」マリアは首を横に振った。

「アッラーにかけて、分からない」

「そんなこと、あるわけないじゃない」。

マリアは目を閉じた。「そんなこと言われても・・・、間違いなく、そんな相手いない」

「ねぇ、よく考えてみて。酔っぱらって、記憶なくしたこととか、ないの？　その時に誰かと寝て、でも覚えてないってこと、あるかもしれないじゃない」

マリアは首を横に振った。「酔っぱらうまでお酒を飲んだことなんてない」。

サスキアは、困った顔でマリアを見た。

「サスキア、私たち、知り合ってどれぐらいになる？　私、嘘つきじゃないって、あなたも知ってるでしょ？」

「じゃ、中絶するしかないね？[※22]」。

このように親友に言われるのですが、マリアは最終的に自分で赤ちゃんを産んで育てることを決意します。

「天使の質問」では、先ほど言及した箇所に出てきた「二つのもの」にサスミタは質問されることになります。でも、彼らが質問する言葉はアラ

ビア語ではなくて地方語なのです。インドネシアはそもそも各地に異なる言語・地方語がたくさん存在します。それらの上位語としてインドネシアが独立する時にインドネシア語を公用語とした経緯があるので、特に年配の多くの人たちの母語は実はそれぞれの地域の地方語なのです。ただし若い人たちには学校教育やメディアを通じてインドネシア語が普及しているため、地方語の使用度は年配者に比べ一般に高くありません。また、近年の社会におけるイスラームの顕在化、イスラーム的なものを人々が求める流れに呼応し、インドネシアではアラビア語の重要性が高まっています。アラビア語起源の単語が、たくさんインドネシア語として使われるようになっていますし、イスラームを学ぶ一環でアラビア語を学ぶ人も増えています。

物語の中ではサスミタは、アラビア語は一生懸命勉強してきたものの、地方語は全く話せないし理解もできないという設定です。それが、天使から地方語で、「あなたの神は誰ですか？」と尋ねられるのです。

> いったい何語なの？　サスミタの心臓は滑り落ちそうだった。冷や汗が両手を濡らした。
>
> 「ダヤック語も分からないのかい？　お前さんの父さんと母さんの言葉だろ」。
>
> ムンカルは、落胆と侮りの入り混じった表情で、頭を左右に振った。サスミタは喉を通らせるため咳をし、勇気を振り絞った。「ごめんなさい。でも……、でも私は……アラビア語で答える準備は出来ています」
>
> 「はぁ？」
>
> ムンカルとナキールは、お互いに顔を見合いながら、同時に叫んだ。そして、大きな声で笑った。ナキールは腹を抱えて転げまわって大笑いし、3分ほど話すことさえ出来なかった。ムンカルも、壁を叩いて、大笑いしていた。[※23]

サスミタは、アラビア語しか勉強しておらず、両親が生まれ育った地域

の言葉は全く理解できないことを、天使に馬鹿にされ、そして罵られるのです。

6-3. 結末・おち

「イスラーム教徒になりたいベイビ」では、豚（ベイビ）はイスラーム教徒になれません。結論が出たあと、議題を提起したキヤイ・フィクリは「では、この結果をベイビに伝えます」と残念そうに述べて、評議会が閉会します。その後、

> 次々と参加者が議場から外に出ていくとき、そのうちの一人がキヤイ・フィクリの腕をつついて耳元でささやいた。「キヤイ、キヤイの故郷までご一緒してもいいですか？」。彼は、少しもじもじしながら、恥ずかしそうに尋ねた。「もしベイビがイスラームに入信するならば、私は、ベイビの肉の味を試してみたいのです[※24]」

これが最後のおちです。インドネシアのムスリムたちの中にも、イスラーム教徒以外の人たちが美味しそうに食べる豚がどんな味なのかに関心を持つ人たちもいるのです。ここでは、ベイビがイスラームに入信するならば、つまりムスリムになるということは、ハラームな存在ではなくなるということが示唆されているのですが、そうなった場合には、その肉の味を食べて試してみたいと、あるウラマーがキヤイ・フィクリに告白する、という結末です。そもそも今日、非イスラーム教徒たちが豚をおいしく食べているということは、インドネシアのイスラーム教徒もみな知っています。イスラームでは食べることを禁じられているのですから、若干の後ろめたさは感じるでしょうが、それはどのような味なのか、興味を持っているイスラーム教徒もいるのです。そうしたインドネシア人ムスリムの心をくすぐるフェビーのユーモアではないでしょうか。

「処女でないマリア」では、主人公マリアは、親友に信用されず、両親から「そんなことはあり得ない、ダメだ、中絶しろ」と言われても、お腹

の赤ちゃんを産む決心を変えません。物語は、以下のような文章で終わります。

> 灼熱の太陽が降りそそぐある日中、ちょうど九カ月と九日目にマリアは出産した。女の子だった。この知らせは、瞬く間に友人たちに広まった。みんな困惑した。聖母マリアだとか言っていたのに、預言者を産んだわけじゃなかった。救世主が生まれたわけではなかったと。一方、マリアは気にしていなかった。赤ちゃんに熱心におっぱいをあげながら、横になっていた。女の赤ちゃんは彼女の目を見つめ、そして言った。「お母さん、私、生まれてこられないかと思った。この世はもうずっと長く信じることを止めてしまっているのね」。マリアは小さな娘を抱きしめて言った。「でも私は信じている」[※25]

生まれてきたのは女の子でした。周囲は、赤ちゃんが預言者や救世主ではなかった、マリアも聖母マリアとは違っていたと決めつけます。これに対する、赤ちゃんとマリアの会話から示唆されるのは、赤ちゃんが救世主の可能性だってある、ということかもしれないと私は感じています。預言者や救世主が常に男性だということに対しても、フェビーは疑問や批判の気持ちを持っており、それをやんわりと表現しているのではないでしょうか。

「天使の質問」の最後の箇所で、天使たちは、懇願するサスミタに対し、「では、望みの質問してやろう」と言います。

> 「助けてください……お願いします……。私はこの時のために、現世の人生の半分以上の時間をかけて準備してきたのです。もう一度、お願いします。皆さんのご配慮をお願いします」。
>
> サスミタは、二人の天使があの大事な質問をしてくれるように、今度は、うなだれて、前かがみになり、全身でお願いした。
>
> 「いいだろう、そんなに言うならば……」[※26]

死後に、天使に聞かれる内容について、インドネシアでは次のように知られています。「あなたの神は誰か、あなたの預言者は誰か、あなたの宗教は何か、あなたの兄弟は誰か」と。実際に、物語でもサスミタは天使にこの質問をされるのですが、結局、口は開くけれども声が出ず、悲しい結末となります。

> 冷や汗がサスミタの身体を流れた。質問には、一つも答えることが出来なかった。[※27]

7. おわりに

作家フェビー・インディラニは、イスラームの保守転回や不寛容の進展、それからイスラームを盾とする男性優位社会の継続に対して、小説を通じた異議申し立てを試みたのではないでしょうか。最初は出版自体も難しかったものの、今は出版して 4 年目となり、共感は広がっていると私は理解しています。2020 年に出版されたフェビーの新作『ムハンマドを追いかけて』は、インドネシアで人気の女性誌 "Femina" が主催する 2021 年読者賞を受賞しています。フェビーは、「読者からの反応で面白いのは、多くの人が、自分の気持ちを代弁してくれる小説だと言ってくれること。多くの人が感じていた『おかしい』と思う状況を描けたのだと思う」と言っています。[※28]

一方で、小説によるこうした試みも、社会の分断の図式、大きな二つのグループのようなものの中に埋没してしまう可能性をフェビー自身は感じています。フェビーは、「こういう本が利用されてしまうこともある。例えば、私のリベラルな友人が、この本をニカーブを着用している友人に渡すとする。それは両者の間に橋を架けることにはならず、かえって敵を作る。リベラルな人の中にも、『私たち』と『彼ら』という対立軸を持っている人たちがいる。私も、そういう言葉遣いをしてしまっていることがあるかもしれない。分裂の枠組みの中に、身を置いてしまっているかもしれない」と言っています。[※29] そういうこともあるかもしれないし、このように

私がフェビーの作品を紹介するときも、同じような危険性を自覚しなければいけないと感じています。私がこうしてこの作品を紹介することで、インドネシア社会の、あるいは世界の様々な分断や分裂を、少しでも食い止める方向に寄与できればいいと願っています。

長くなりましたが、ひとまず私の発表は以上です。ありがとうございました。